

# かなりイレギュラーな経歴ですが…

2005年度 博士前期課程修了 加藤創さん

## なぜ総合学術研究科に？

私は学部生の時に原田健一教授の研究室に配属され、そのまま成り行きで総合学術研究科に入った感じで、「なぜ選んだのか？」と聞かれてもまともに答えられません。その上、博士前期課程は一応まっすぐ修了したものの、後期課程に進学するも2年で中退、その4年後に論文博士を取るというかなりイレギュラーな経歴をたどり、先生方には大変なご迷惑をお掛けしました。

## 楽しかったこと

今でも先生に言われますが、学部の実習が大好きで、TAをしているときが一番張り切っていました。他には、夜中に先輩や後輩たちと遊んだり、アセトン片手に研究室に現れたゴキブリ退治に走り回ったり、しょうもないことがいろいろと楽しかったです。

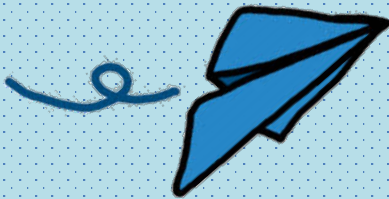
当時は、「大変だ」、「時間が足りない」などと常に言っていました。研究以外のことはほとんど考えなくていいし、自分のことにいくらでも時間を使えるし、あんないい時間はありませんでした。10年前の何もわかってなかった自分に説教してやりたいです（笑）

## 得られた成果

他にも紹介されていますが、総合学術研究科の一番の特色は文理融合の研究科だということです。おかげで社会学や心理学など、一生無縁だと思っていた学問の講義や研究発表を何度も聞く機会がありました。

当時はあまり文理融合を意識していなかったため、研究に直接生かすことはできませんでしたが、私たちの研究で得られた技術をうまく使うためには、使う人や影響を受ける地域住民など異分野の方々の理解が必要だということを感じさせられました。

また、社会人入学で様々な経験を積んだ人が多くいました。それぞれの専門分野や背景もバラバラで、見聞を広める、あるいは自分の知識の浅さを思い知るといった意味では非常に役に立ったと思っています。

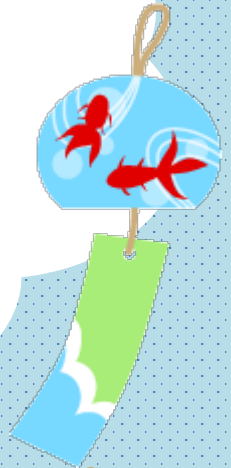


## 今の仕事に活かされていること

自分が常識だと思っていなくても、他人には全く通じないことがあると何度も感じさせられました。自分が使っている装置の説明が理工学部の学生には全く理解してもらえなかったときはちょっとショックでした。

今は東北の薬学部で教員をしていますが、入学したての1年生の講義や実習では、話が通じないことがよくあるので、当時を思い出してできるだけ簡単な言い回しを考えるように心がけています。

研究に対する考え方や姿勢、卒業研究の学生への指導方法等は院生時代に学んだことをそのまま活かしています。



## 印象に残っている授業や教員

文系科目の講義はどれも新鮮に感じて楽しかったです（ごく少人数なのに堂々と居眠りもしました…）。講義を受ける方は気楽なもので、「どうせ専門外だからわからなくてもしょうがない」と勝手に開き直っていましたが、教える側の先生方は理解度が全く異なる学生相手に四苦八苦なさっていたのは印象的でした。

自分の指導教授（原田健一先生）の印象があまりに強烈で、他には特別印象的な先生はいませんでした。教員の数やたらと多かったのはよく覚えています。入試の面接ですらっと囲まれ、定期的開催される総合コアやプロジェクトの講演会でも学生よりも教員のほうがたくさん座っていて、いつもドキドキしていました。

## いい雰囲気の研究科です！

入学前に挨拶に行ったら「『薬学』の学位が欲しいなら、名前だけうちの研究室に所属する道もあるよ」と言って下さった薬学研究科の先生もいました。学位の名前にこだわる人は世間にたくさんいるようですが、私は今のところデメリットは感じたことはありません。名刺を渡した時に「博士（学術）って何ですか？」と聞かれることぐらい。むしろ話のネタになるので重宝しています（笑）

いろいろな分野の先生がいて、耐塩植物の話、海の話、心理学の話など面白い話をいろいろ聞いて、楽しくためになりました。研究分野が広いので、少し離れた視点からのヒントを得られる機会が多くあり、研究環境としては恵まれていると思います。逆に、専門分野を深く追求するという点では少し弱いかもしれませんが、同分野の専門家を探すのはそれほど難しくないので問題ないと思います。また、人数はあまり多くないですが、その分教員と学生の距離が近く、いい雰囲気の研究科でした。

